

# 文化は誰のものか?

—ネイション・ステйтを越えて

明治大学大学院教養デザイン研究科

# 目 次

はじめに	林 雅彦	5
開会の辞	小畠 精和	8
大学院長挨拶	小笠原英司	11
基調講演		
東アジア文化圏における人文学の復権	山泉 進	13
院生セッション		
在日コリアンと文化	河 庚 希	21
道成寺芸術における近代化の仕組み —「道成寺縁起絵巻」と「清姫」の例を中心として—	崔 仁 香	32
夏目漱石晩年の人生観とその文学作品との間 —「則天去私」と漢詩との係わり—	崔 雪 梅	39
パネルディスカッション		
東アジアにおけるティアスボラ文化の形成過程と 民族のアイデンティティ確立	権 宇	48
茶道の伝統からみる日本文化の創造力	朴 銓烈	56
台湾の中国語における日系外来語「達人」の使用状況について	鍾 季 儒	64
越境する日本ポピュラー文化とメディア —文化ハイブリッド形成と市民—	安本 成子	71
石川啄木の受容をめぐつて	池田 功	82
討論・質疑応答		91
シンポジウム・パンフレット(次第・発表者プロフィール)		108
編集後記		112

先がたいぶ弱くなっているといわれていますが、研究機関が一二〇以上もありまして、これだけの数の日本語学部が置かれているわけです。こうしたデータを見ますと、これらの大学あるいは研究機関相互の学術交流をどうやって進めていくのかということを考えざるをえません。われわれも是非参加をしたいと考えています。今日は、日本語でこれだけのシンポジウムを開催することができました。おそらく中国でも韓国でもできるだらうと思います。そうであれば、日本で日本人を中心になって学術交流をするのではなくて、むしろ、われわれはこれまでとは違う役割を創りだしていく必要があるのではないかと考えました。

李東哲先生は「アジア日本研究機関連合会」を作ろうと呼びかけられました。私ももちろん賛成します。われわれとしては日本語で書かれた論文を相互に評価するようなシステムを作り上げたいと思いました。いきなり大きな組織はできないかもしれません、こうした評価システムを作つてもらえば、われわれも、日本語を母国語とする者として積極的に参加できるのではないかと考えます。私としては、この相互評価システムを是非作りたいと考えています。それを学術交流の出発点にす

ることができるのではないかと考えています。私たちが学術論文集を作りますとき、査読というようなことがおこないますけれど、こうしたことをもつと国際的に行い、相互の研究を紹介すると同時に評価をしていくシステム、それも、先ほど言及しましたランキングとはなるシステムを作つていつたらよいのではないかと考えています。

ちょうど時間になりましたので、私の基調報告を終わらせていただきます。

## 【院生セッション】

### 在日コリアンと文化

カリフォルニア大学サンディエゴ校  
エスニック・スタディーズ研究科博士課程

河 庚 希

初めてまして。カリフォルニア大学サンディエゴ校エスニック・スタディーズ研究科に在籍しております、河庚希と申します。まず、今回のシンポジウムを実現するためには尽力してくださった方々、そして貴重な発表の機会をくださった、鈴木先生にお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございます。

今日発表させていただくテーマは、今取り組んでいる博士論文の中の一部です。論文のテーマは「九・一七以降の在日コリアン」です。九・一七というのは九月一七日のことで、二〇〇一年にビヨンヤンで行われた日朝会談で金正日総書記(当時)が朝鮮民主主義人民共和国(以

下、「北朝鮮」)関係者による日本人の拉致を認めた日です。今年はその九・一七からちょうど一〇年目にあたりますが、未だに日朝の国交は正常化されておりません。九・一七以降、在日コリアン、とりわけ日本全国にある朝鮮学校に通う子どもたちへの暴力が爆発的に増えました。六〇年代や七〇年代には「地上の楽園」と言われ、九〇年代になって「ミサイル問題」や「食糧難」などネガティブな報道が大半を占める中でも、一定の正当性を保っていた「北朝鮮」という国が、拉致問題によって「完全悪」のレッテルを貼られ、あらゆる制裁を受けています。一方で、空前の「韓流ブーム」の中、韓国語を勉強したり、韓国文化に親しみを覚える日本人が増えている

現実もあります。朝鮮学校の学生はいわばこの一つの大好きな波の影響を一番敏感に受ける存在です。かれ／かのじよらの「いま」を知ることで、日本という社会をより深く知ることができますのではないかと思っています。

では本題に入りたいと思います。作家で研究者の徐京植氏（二〇〇二）は「在日朝鮮人」を「日常の植民地支配の歴史的な結果として旧宗主国である日本に住むことになった朝鮮人とその子孫」であると定義しています。つまり、現在の国籍が韓国であれ、日本であれ、また事实上の無国籍状態である「朝鮮籍」であれ、朝鮮半島にルーツを持ち、日本で生活している者、ということです。徐はさらに、特徴として以下の四点を挙げています。

- 一、「少数民族」一般とは異なり、「本国」をもつ「定住外国人」であること
- 二、「移民およびその子孫」一般とは異なり、その定住地がほかならぬ旧宗主国であること
- 三、本国が南北に分断されていること、そして
- 四、その本国（とくに「北」）と日本とが分断されているということ。その結果、在日コリアンは「ヨコにもタテにも分断された存在であり、そうした分断線

「在日コリアン」一世にとつて、また戦中に皇民化教育を受けた一世にとつて「バッシング」こそがDefault Option であつた。多くの在日コリアンはさまざまな方法で「普通の日本人」としての日常生活を送っている。つまり、アフリカ系アメリカ人とは異なり、在日にとって「バッシングをしないこと」とは「民族のクローゼット（殻）」を破り、朝鮮の名前や血筋を引き合いに出しながら、常に意識して民族的アイデンティティを強調しなければならない、ということなのである。（二〇：筆者訳）。

「民族性」を前面に押し出すことなく、積極的であれ消極的であれ「普通の日本人」として「見えない存在」として生きている在日コリアンが、今のマジョリティである、ということです。

そんな中、敢えてこのDefault Optionを選択せず、「見える存在」として生きている人びとがいます。それは朝鮮学校に通う学生です。朝鮮学校の歴史は日本の敗戦に伴い、朝鮮半島が植民地支配から解放されて間もなく始

を個々人の内部にまで抱えこまされた存在である」（一五三）ということ。

二〇一年の統計によると、日本で「外国人」として登録している二〇七万八五〇八人のうち、「韓国・朝鮮」籍者は五四万五四〇一人で、中国籍者（六七万四八七九人）に次いで一番目の多さとなっています。<sup>22</sup> 約五五万人の「韓国・朝鮮」籍者に加え、「帰化」によって日本国籍を取得した者が三四万一九三人<sup>23</sup>。さらに、一九八五年の国籍法改正によって日本国籍を保持するようになつた者が二〇万から三〇万人いると言われていますので、「在日コリアン」は一〇〇万人以上、日本の総人口の約一%にあたると推定されます。

文化人類学者の Sonia Ryang（一九九七）によると、その九〇%以上は日本生まれ、ほとんどが日常生活で「日本名」を使用しています（「在日韓国人意識調査中間報告書」二〇〇一）。社会学者の John Lie（二〇〇八）はこの「バッシング」という行為が在日コリアンにとっては「Default Option」つまり、「選択肢が特定されない限り、自動的に選ばれるもの」であると述べています。

まきました。植民地期に禁止されていた朝鮮語を学び、来るべく「帰国」に備える、というのがその主な目的で、一九四六年の時点で全国五一五の初級学校、四の中級学校、一二の青年学校で総勢四万三三六二人が学んでいました（金德龍二〇〇四、二七二）。

日本政府とGHQ／SCAPによる度重なる弾圧を受け、多くが閉鎖に追い込まれましたが、一九五五年より、朝鮮民主主義人民共和国を支持する「在日本朝鮮人総聯合会」（略称、「総聯」）が運営を開始し、徐々に教育環境が整えられ、学生数も再び増加はじめました。朝鮮学校を運営している「総聯」は在日コリアンを「北朝鮮の海外公民」と規定し、この姿勢は朝鮮学校の教育にも反映されていましたが、近年では「在日コリアン」の現状を踏まえ、大幅なカリキュラムと教科書の改正がなされました。

二〇一二年現在、約八五〇〇人の学生が全国にある一〇二校（実際には六六ヶ所）の朝鮮学校で学んでいます。これは、就学年齢にある在日コリアン約一〇万人のうち八・五%で、学生は日本生まれの三世と四世が大部

分を占めています。また、在校生のうち「朝鮮籍」者が約六〇%、「韓国籍」者が約四〇%で、「日本国籍」者もいます。中には、韓国から来た学生、中国から来た「朝鮮族」が在籍している学校もあります（宋基傑二〇一二）。

文化研究者の韓東賢氏（二〇〇五）が述べているように、在日コリアン社会全体から見れば明らかな「少数者」であるにも関わらず、その「可視性」によって、「朝鮮学校」という記号は昨今、もつとも分かりやすい在日表象のひとつになっています。「見える存在」であるがために、冒頭でもお話をしましたが、「拉致事件」発覚直後からさまざまな暴力や暴言の対象となってしましました。具体的には九月一七日直後から一ヶ月間で、確認されているだけでも三〇〇件の暴力、暴言（Johnston二〇〇二）。「在日特權を許さない日本市民の会」「在特会」によるヘイトスピーチや器物破壊、そして、日本政府による「高校無償化」就学支援制度からの排除など、「制裁」という名目で絶対的少数者である朝鮮学校コミュニティに甚大な被害を及ぼしています。アメリカで九・一一の同時多発テロ以降、アラブ系、南アジア系住

ハイアリティティの議論とも通じるものです。かなり日本文化に「同化」してしまっている在日コリアン三世、四世たちがどのように「異文化者」を「演じて」いるのか？また、どのような「記号」をどのように用いて「自己文化」と「異文化」の境界を生産、維持しているのか？という問いを立てて、今フィールドワークをしている真っ最中です。

マイノリティやディアスporaの文化は常にハイアリットであるという議論がある一方で、戦略的本質主義としての文化的役割も無視できません。フランス社会におけるイスラム系移民に向けられる差別と抑圧に対する抵抗として、またアイデンティティの主張として、自らの意志でベールを着用するイスラム女性たちのように、朝鮮学校の女子生徒もまた自分たちを差異化し、可視化する道具として、一九六〇年代前半に自発的に「チマチョゴリ」を着始めました（韓東賢二〇〇六）。後に正式な制服となつたチマチョゴリは、現在も中級部と高級部の女子学生が第一制服として着用しています。

本質的な文化は、他者との間にある境界線を再生産す

民やイスラム教徒が「スケープゴト」として差別の対象となつたのを、彷彿とさせるような事態だと憂慮する研究者もいます。

このような現状を改善するために、在日コリアンや日本市民は次々に声を挙げています。運動の中では、「多文化共生」という言葉がよく使われますが、「多文化共生」を推進するためには、まず、異文化を見しなければなりません。しかし、果たして在日コリアンとは「異文化者」なのでしょうか？日本で生まれ育った在日コリアンで社会学者の鄭暎惠氏（一九九四）が問題提起をしています。

「…もう既にかなり同化させられてしまっている私が『同化反対』という時、同化してしまった私の中の『部分』とどう向き合って行けばいいのだろうか」（八）

この問いは文化的「純粹性」や「独自性」を基にした本質主義的な民族アイデンティティを描るが重要な問いで、Stuart HallやLisa Loweらの文化の異種混溶性、

るだけでなく、内部の統制を強めるという侧面もあります。朝鮮学校における「集団アイデンティティ」は幼稚学校より朝鮮語教育や歴史教育、そしてクラブ活動や生徒会活動を通して強化されていきます。「民族的であること」と「集団を優先する」価値観が重んじられる朝鮮学校において、他の科目とは一線を画して、独自のカリキュラムと教育法で「個人の表現力」を高める授業があります。それが「美術・図工」です。

「見せようと描くのではなく、本心が表れるように。だから表現の自発性と純度を高く評価します。」これは、韓国のメディア「民族21」のインタビューに答えた朝鮮学校の美術教員の言葉です。全国のほとんどの朝鮮学校には美術を専門に学んだ教員が配置されています。一九七〇年に始まった「在日朝鮮学生美術展」（略称「学美展」）は今年で四回を迎え、毎年八月に行われる「中央審査会」では、地方予選を勝ち抜いた四〇〇〇点もの作品を一〇数名の美術教員が一週間をかけて審査します。審査会は学生の作品を見ながら活発にアイスカッショーンをし、意見交換することで美術教員にとって、年に一度のワーキングショップの場としても機能しています。

朝鮮学校の美術教育の特徴として、授業の進め方などの大半が美術教員の裁量に任せられてきたこと、が挙げられます。これには二つの理由が考えられ、一つは、朝鮮学校が日本政府からの援助が無い代わりに、教科書やカリキュラムに対して文科省の「指導」が長年及ばなかつたということ。もう一つは「民族性」と「集団主義」の維持と強化という観点から他の科目に比べて、朝鮮学校内でも比較的「指導」が緩かつたことです。

チマチヨゴリや民族舞踊のような「わかりやすい異文化」が「多文化共生」の表舞台にあるとすると、美術や図工の時間、スペース、活動は朝鮮学校内でも日本社会でもさほど眼光を浴びない裏舞台にあると言えます。

文化人類学者のJames C. Scott（一九九二）は被抑圧者と抑圧者との間にあるやりとりを二つに分けて理解しようとしました。見える形で行われるスピーチやパフォーマンスというPublic Transcriptsが存在する一方で、権力者の目が直接及ばない舞台裏ではHidden Transcriptsといわれる被抑圧者による自己表現が行われている、と。「わかりやすい異文化」の記号は日本社

なつてきました。学美展の中央審査会で入選した六〇〇点ほどの作品は、五ヶ月かけて全国一〇都市を巡回しますが、ある地方展を訪れた鳥取県の学校関係者は作品の力強さに感動し、朝鮮学校が一つもない鳥取県での展示を実現させました。また、社会学者の仲野誠氏は「四〇年間、試行錯誤しながら生き延びてきた奇跡としての学美」と表現し、「その経験から生み出された知恵と生きる技法は、既にこの社会の財産だと」述べました。

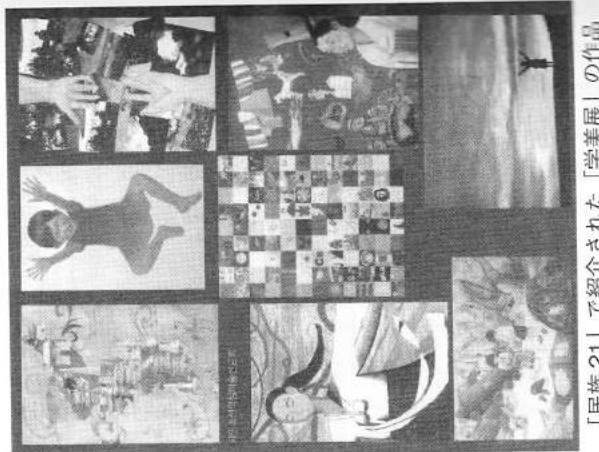
日本社会でのこのような評価を受け、朝鮮学校関係者の「美術」に対する視点も変化してきたようです。ある地方審査会では美術教員を激励するために、縦聯関係者が来ていましたが、その方は美術を朝鮮学校のサバイバル戦略の一つとして捉えていました。少子化や民族離れるによる学生数の減少に加え、「北朝鮮」制裁のあおりを受けている朝鮮学校。さらには昨年の東日本大震災で被災した宮城と福島の朝鮮学校への支援などの「運動」の新たなツールとして見直されたのです。

一方、韓国でも「民族21」という雑誌が、教員たちの学生に対する懲罰と献身、そして同胞愛の結果としての

会への批判が表面化しつらいため権力構造を維持しながら、「二流市民」として「外国人」を受け入れようとする多くの「多文化共生」論にとって危機感をあおらない、都合の良い材料となってしまっています。

一方、権力者の目につかない舞台裏で行われるディスクoursesであるHidden Transcripts、この場合には朝鮮学校の美術教育ですが、少なくとも二重の役割を果たしていると言えます。まず、戦後一貫して朝鮮学校を弾圧してきた日本社会への批判、そして集団アイデンティティとそれを第一に重んじる価値観を再生産している朝鮮学校教育への批判です。美術と図工の授業は、「民族」や「集団」だけではなくくことのできない「自己」を尊重し、絵や立体作品、映像作品で表現することに遊びを見いだせるような授業となっています。ただし、それを可能にしている「学美展」や年に一度の審査会・ワーキングショップは、他でもない朝鮮学校の集団意識や横の繋がりによって支えられているということを見落とすことはできません。

近年この舞台裏の活動が、表舞台で注目されるように



「民族21」で紹介された「学美展」の作品

「学美展」に注目しました。統一の希望である「学美展」をいつかソウルに招待したい、と記事は締めくくられています。記事の最後に紹介された学生の作品の一部をご紹介します。

学美展では少数派である「民族性」を表現したものが多く紹介されていることが分かります。その他にも、東日本大震災で被災した二つの朝鮮学校を支援する目的でモンダン・ヨンビル（日本語で「ちびた鉛筆」）という団体が韓国で設立されましたが、支援活動の一貫として



共同代表の權海孝氏の文章と朝鮮学校生徒の絵画などを合わせた『私の心の中の朝鮮学校』という本を韓国と日本で発表しました。

朝鮮学校への支援活動に共鳴して集まってきた韓国人ひととの言葉をいくつか紹介したいと思います。

「国籍が韓国であれ、日本であれ、そして朝鮮であれ、みんな同じ血筋だと思います。」

う形で「可視化」され、それぞれの国民国家の枠組みの中で、ある役割を担ったポジションを得ることになりました。

不可視化によって可能になるもの、可視化によって不可能になるもの。「学美展」は在日コリアンと文化、そして国民国家との複雑な関係性を教えてくれます。

社会学者の Monisha Das Gupta (二〇〇六) は、排除か包摂かという二者択一ではなく、「place-taking politics：法的・政治的権利の獲得」と「space-making politics：ヒエラルキーを生む構造の批判」という二つの手法を戦略的に用いて権利の獲得と社会の変革を目指すマイノリティ運動のありかたを示しました。また、日本で三世として生まれ育ち、日本の外国人登録上の表記が「韓国籍」でありながら、「北朝鮮」のサッカー代表選手となつた鄭大世氏の「在日という国」という言葉は、国民と難民、親北か親南か、日本人かコリアンか、ホームに生きるのかアイスボーラーに生きるのかといったあらゆる二着択一を超える在日の可能性を感じさせてくれます(慎武宏二〇一〇)。朝鮮学校の美術教育、「学美展」は、

「私の心の中の朝鮮学校」

「みんな同じ民族だということを改めて考えさせられました」

「同じ血筋」「同じ民族」という根柢から在日コリアンを捉えるとき、「同じ」というストーカンの下で周縁に追いやられ、こぼれおちてしまうものとは一体何なのでしょうか。在日コリアン文化というのは、日本と朝鮮の文化の単なる合併でもなければ、朝鮮半島の文化を単純に継承しているものでもない。朝鮮半島にルートをもち、日本の地で生きて来た人ひとの知恵や経験、感性を多様なかたちで表現したもので、朝鮮文化と日本文化、そしてグローバル化の中でさまざまな文化が予測不可能な形で混ざり合つたものの総称です。

歴史的にみると、在日コリアンとは、あらゆる「排除」の対象となつてきた存在です。「排除」され、「不可視化」されてきました。日本でも韓国でも。しかし、昨今の多文化共生運動と韓国でのコリアン・アイアスボラへの高い関心の中で、「在日コリアン」という存在はその「文化」や「文化活動」を通して、新たに「部分的な包摂」とい

そのような在日コリアンの在り方をさまざまな媒体を通して表現する大切な場であり続けるでしょう。引き続きフィールドワークを通して、九・一七以降の若い世代の多様な生き方を学んでいきたいと思います。

#### 参考文献

- 金德龍(二〇〇四)『朝鮮学校の戦後史』一九四五、一九七二』社会論社
- 慎武宏(二〇一〇)『祖国と母国とフットボール』武田ランダムハウスジャパン
- 徐京植(二〇〇二)『平難民の位置から・戦後責任論争』と在日朝鮮人』影書房
- 宋基傑(二〇一二)『語られないもの』としての朝鮮学校』在日民族教育とアイデンティティ・ボリティクス』岩波書店
- 鄭暎惠(一九九四)『開かれた家族に向かって—複合的アイデンティティと自己決定権』『女性学年報』第一五号
- 韓東賀『民族教育メディアの中の「在日」と「朝鮮学校」、そのリアリティのありか』現代思想二二(四)二〇〇五:二二四一-二三

- 法務省 登録外国人統計 [http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html) (accessed 11/15/2012)
- 在日韓国人意識調査委員会 (一〇〇一)『在日韓国人意識調査中間報告書』
- 在日本朝鮮人人権協会 (一〇一〇)『人権と生活』Vol.34
- Das Gupta, Monisha (2006). *Unruly Immigrants : Rights, Activism, and Transnational South Asian Politics in the United States*. Durham, NC : Duke University Press.
- Johnston, Eric. "North Koreans Get Little Sympathy in Japan : Pyongyang's Abductions Spell Fallout for Chongryun." *The Japan Times*, Nov. 20, 2002.
- Lie, John (2008). *Zainichi (Koreans in Japan) : Diasporic Nationalism and Postcolonial Identity*. Berkeley, CA : University of California Press.
- Ryang, Sonia (1997). *North Koreans in Japan : Language, Ideology and Identity*. Boulder, CO : Westview Press.
- Scott, James (1992). *Domination and the Arts of*

*Resistance*. New Haven, CT : Yale University Press.  
이철수 "제일조선인의 대표축제, 제일조선학생미술전람회를 서울에서!"『민족』27, Oct. 2012 : 124-129.

## 注

- (1) 徒は、朝鮮半島にルーツを持ち、日本で生活している者の総称として「在日朝鮮人」という言葉を用いている。詳細は「半難民の位置から一戦後責任論争と在日朝鮮人」(一〇〇一)を参照。
- (2) 法務省、登録外国人統計 (一〇一〇)によると、外国人として登録している「中国籍者」は六七万四八七九人、「韓国・朝鮮籍者」は五四万五四〇一人、「アラジル国籍者」は一二万三二三人、「フィリピン国籍者」は一〇万九三七六人。
- (3) 『人権と生活』vol. 34 (2012) p.77 参照。
- (4) 最もよく知られた朝鮮学校弾圧事件として「阪神教育闘争」が挙げられる。一九四八年一月二十四日に文部省学校局長が各都道府県知事に対して出した「朝鮮人設立学校の取扱いについて」という通達に基づき、大阪府と兵庫県では朝鮮学校の閉鎖が命じられたが、この弾圧に対して、四月二三日には大阪で、四月二十四日には神戸で大規模な抗議集会が開かれた。この事態を重く見た米駐留軍は、四月二十四

日から二八日まで非常事態宣言を発動し、闘争に参加した中学生の金太一少年が日本の警察の発砲によって死亡するなど多くの死傷者と逮捕者を出した。「阪神教育闘争」は民族教育を守る闘いとして現在も朝鮮学校や在日コリアンコミュニティに語り継がれている。詳細は金慶海著『在日朝鮮人民族教育の原点』(一四・一四阪神教育闘争の記録) (一九七九) を参照。

- (5) 一九五七年四月から一〇一一年四月までに一五八回にわたり、計四七〇億円近くの教育援助費が朝鮮民主主義人民共和国から朝鮮学校へ送られている。一方で、日本政府は朝鮮学校を学校基本法の定める「一条校」として認めておらず、教育援助も一切していない。
- (6) 一〇〇九年から一〇一〇年の間、二度に渡り「在特会」が京都朝鮮第一初級学校に対し、学校が児童公園の一部を運動場として使用していたことを「不法占拠」だとして、サッカートールや朝札台を勝手に撤去、スピーカーの電線を切断し、さらに学校に対して差別発言を繰り返した事件。
- (7) 一〇一一年七月二八日に東京で行われた『私の心の中の朝鮮学校』日本語版出版記念イベントでの寄稿『在日朝鮮学生美術展との出会い』より。
- (8) 一〇一一年一〇月二一日に同志社大学で行われた「京都

朝鮮初級学校チャリティー・第七回フレンドシップコンサート』これからも、ずっと輝けウリハツキヨ!』で上映されたモンタン・ヨンビル紹介ビデオより。

## 編集後記

何回かの企画委員会を経てシンポジウムのタイトルが「文化は誰のものか?」と決まった。

その間、ある卒業生のことをすつと想っていた。十年ほど前、学生たちと海外に出たときのことだ。在日韓国人の学生が「俺、みんなと色が違うんだよね」と香港でバスポートを出すときに言っていた。もちろん、他のメンバードはバスポートの色など、まったく気にしていないなかつた。だが、人と人のつながりに「国家」が不意に裂け目を入れたように感じた。

今ではその学生も結婚し、自分の会社を立ち上げるまでになっている。

シンポジウムを企画し、この論集をまとめるまで、多くの方々と仕事を一緒にできた。お名前を挙げる余裕はないが、あらためて深い感謝の念がわいてくる。

ありがとうございました。

明治大学大学院教養デザイン研究科・准教授

鈴木哲也

2013年3月31日発行

大学院教養デザイン研究科開設5周年記念シンポジウム報告書

## 文化は誰のものか? —ネイション・ステイトを越えて

発行者

明治大学大学院教養デザイン研究科  
〒168-8555  
杉並区永福1-9-1 明治大学和泉キャンパス  
TEL 03-5300-1529